

第1章 点字・点訳の基礎知識

その5 点字の書き方

1. p7 1. パソコン点訳

パソコン点訳の画面について、私たちの団体では凹面で入力をしている人と凸面で入力をしている人がいて、お互い最近になって気がつきました。

実際には共用パソコンで少し混乱するくらいで、個人個人がそれぞれのパソコンで点訳するので問題はないのですが。

凹面は点字板から入った人は、すっと移行しやすい一方で点字が読みにくい。凸面入力は点字板入力は難しいが、点字が読みやすい。

どちらも良い悪いということはいえないように思いますが、この件で、コメントをいただければ嬉しいです。世の中の状況はどうなのでしょう。

【A】

画面の表示についてのご質問でしょうか？

画面表示は凸面にされることを強くお勧めします。

点字盤で講習会などを受講されても、点字は凸面から読むものですので、初めから凸面で読むように練習してください。点字盤で書いても、見直しは凸面から行うようにすれば、凸面から読むことは苦になりません。街中の点字表示も、酒類やドレッシング・ケチャップなどの商品、洗濯機などの電化製品もすべて凸面から読むようになっていますので、ぜひとも画面表示は凸面で行ってください。

長年、点字タイプライター（ライトブレーラー）で点訳し、凹面で書くことから脱却できない方は、入力はライトブレーラー方式でも行うことができますので、入力だけ、その方式に設定し、読む場合の画面表示は凸面でするようにしてください。ぜひ、皆さんで統一されるようにお勧めします。

その6 点訳・校正の位置づけ

1. p12 2. 校正

校正者について、点訳者がAとB、1次校正がCとA（AはBの校正）、2次校正がAというのは、2次校正の体をなしていないと考えます。A・B・Cいずれも晴眼者です。

校正表示基準では、2校は「1校終了後、別の人が再度原本照合した資料」とあり、

校正基準でも「点訳資料では、誤りの見落としや、校正者の主観・思いこみによる校正ミスを少なくするために、また、校正方法の短所による校正もれを防ぐために、校正者と校正方法を変えて2回以上校正を行うことが、良質の点訳資料の提供につながります。」とあります。

以上を踏まえると、点訳者Aが2次校正をするのではなく、BかC、あるいは別人が2次校正を行うべきかと考えますが、いかがでしょうか。

【A】

校正の定義から言えば、点訳者とは別の人が校正することが望まれると思います。

施設・グループによってご事情はおありになると思いますが、

AとBが点訳、1次校正は、交換してBとAが校正、2次校正はCが行うということもできます。3人で点訳・校正を行うのでしたら、この方法が効率的だと思われます。

2. p14 3. 調査

「来し方」「免れる」を「こしかた」「きしかた」「まぬかれる」「まぬがれる」と最近はおそらくといえば後の方が使われるようですが、どちらでも統一されていればいいという解釈でいいのでしょうか。広辞苑など見ますと「とも読む」のように書かれています。校正者によって解釈が分かります。点訳者はどちらにすればいいか迷います。

【A】

「免れる」は、「まぬかれる」に語義がある辞典の方が多いのですが、「まぬがれる」とする辞典も複数あります。常用漢字表では、「まぬかれる」と書いてあり、備考に《「まぬがれる」とも》とあります。文化庁の「言葉に関する問答集」によると、古くは「まぬかれる」ということです。

これらのことから、「まぬかれる」が本来の読みになると思います。

ただ、「まぬがれる」と点訳してあっても、校正の指摘対象にはならないと思います。

「来し方」は雅語に分類される古い言葉で、「こ」は「来（く）」の未然形、「き」は連用形です。現代の国語辞典では違いがはっきりしませんが、古語辞典でみると《平安時代までは「こしかた」は「空間的に通り過ぎてきた方向」、「きしかた」は「時間的に過ぎてきた過去」と使い分けられていたが、平安時代末期以降は使い分けが乱れ、鎌倉時代以降は、多く「こしかた」が用いられるようになった》と書かれています。現代の国語辞典でもよく読むと、意味が二つ書いてあり、「こしかた」と「きしかた」ではその順序が逆になっています。ただ、現在では使い分けが困難ですので、どちらで読んでも校正の対象にはならないと思います。

短歌では「こしかた」の読みが多く用いられるようです。

3. p14 3. 調査

「女官」は、「じょかん」「によかん」どちらの読みでもよいでしょうか。

【A】

「女官」は「によかん」「じょかん」どちらの読みもあります。律令制の下では「によかん」または「にようかん」ですので、江戸時代までは「によかん」「にようかん」と言います。明治時代以降の制度では、「じょかん」と言われたようですので、原本の時代によって、読み分ける必要があります。

4. p14 3. 調査

「期日前投票」は、語例集には「きじつぜん」とあります。マスメディア等からの音声としては「きじつまえ」が多いです。一般的にも「きじつまえ」が多いと思います。法律用語として点訳するのであれば「きじつぜん」だとは思いますが、生活の情報として、今回市議会だよりで点訳するにあたり、「きじつ■まえ」の方がわかりやすいのではないかと思います。

【A】

点訳では「キジツゼン■トーヒョー」とします。

「きじつまえ」と発音するのは、テレビ、ラジオなど、音声で聞く場合のわかりやすさからの対応です。「NHKことばのハンドブック」でも、《選挙管理委員会などでは「きじつぜん」と読むが、放送ではわかりやすさから「まえ」と読む》と断っています。市議会だよりでしたら「きじつぜん」と読むことをお勧めします。

なお、「出生前診断」も「しゅっしょうぜん しんだん」です。

5. p14 3. 調査

万年筆の各部の名称で「首軸」の読みは「シュジク」「クビジク」どちらでしょうか。ネットの専門的なページには「しゅじく」のルビがありましたが、「主軸」と混同するせいでしょうか一般的には「くびじく」と呼んでいる人も多いようです。

【A】

万年筆の各部の名称を解説したページでは「しゅじく」とルビが振ってありました。

「しゅじく」は読み方として自然だと思います。

「しゅじく」か「くびじく」かについては、本来の読みをするという姿勢で点訳するのがよいと思います。たとえば、専門家が専門用語として読むような読み方であればそちらを選択することもあるかもしれませんが、俗称のような読み方よりは、本来の読みをした方がよいと思います。

行政の長を意味する「首長（しゅちょう）」を俗に「くびちょう」といったりしますが、点字では「シュチョー」と書きます。

6. p14 3. 調査

「生者」の読み方についていつも悩みます。

「日本では死者と生者をきれいに断ち切る」という見出しがあります。

校正をしているのですが、点訳者は「しょうじゃ」と読んでいます。

辞書には「しょうじゃ」「せいじゃ」「せいしゃ」とありますが、どのように読むのが適切なのでしょうか。

書名などで「死者と生者」の文言が含まれているものを調べますと、「せいじゃ」または「せいしゃ」になっていますが、「しょうじゃ」も辞書に載っていますから校正で指摘しない方がよいのでしょうか。

【A】

「セイシャ」「セイジャ」「ショージャ」ともに同じ意味で用いられていますので、どれも間違いではないと思いますが、「ショージャ」は仏教用語になります。

一般的な文章の中では、セイジャ、セイシャと読むのがよいと思います。

「日本では死者と生者をきれいに断ち切る」のように「死」と対比させる場合は、「セイジャ」「セイシャ」の方が、あっていると思います。

7. p14 3. 調査

「トンボは草原や林の縁の部分で過ごします」の「縁」は「ふち」でしょうか。「へり」でしょうか。「ふち」と「へり」はどのように読み分けたらよいのでしょうか。

【A】

国語辞典で引くと、「へり」にも「ふち」、「ふち」にも「へり」と言い換えられていて、物の周りの部分、物の端の部分を表すと書いてありますので、明確な使い分けは難しいと思います。強いて言えば、「ふち」は、物の端、境界になる部分、きわをさし、「へり」は少し広がりをもつ周り、物の境界もその外側もさすような意味が込められているようです。「ふち」は「淵」、「へり」は「辺」も当てはめられます。額縁、崖っぷち、眼鏡のふち、また、利根川べり、畳のへり、などの例がありました。

ご質問の場合は、「トンボは草原や林のへりの部分で過ごします」の方がよいのではないのでしょうか。

8. p14 3. 調査

名前の書き方をお聞きします。

八郎右衛門・重右衛門・文右衛門、これらは、ハチローエモン・ジューエモン・ブンエモンでよいのでしょうか。それとも、ハチローウエモン・ジューウエモン・ブンウエモンでしょうか。

【A】

「右衛門」はそれだけなら、役職名としては、「衛門府」の「右」で「ウエモン」と読んでよいと思いますが、「～右衛門」となると「～エモン」と読まれるようです。調べてみると《「右衛門」は、元々は「うゑもん」。「ゑ」は「we（うえ）」に近い発音で、「uwemon（ううえもん）」だったようです。それが「u」と「we」の発音が一緒になって「wemon（うえもん）」。その後、「ゑ」と「え」の発音が区別されなくなり、「emon（えもん）」と発音するようになった》という説明もありました。ですから、「八郎右衛門・重右衛門・文右衛門」は「ハチローエモン、ジューエモン、ブンエモン」と読んでよいと思います。

9. p14 3. 調査

「無関係であるとテレビカメラにむかって無謀な強気をもっていた。」「その十億円の利用について追及されて、池谷の強気はとうとう崩れた。」という文で「強気」は「ゴーチ」と読んでいいのでしょうか。

【A】

「ごうぎ」（豪儀・強気・豪気）は、「することが大きくて度肝を抜かれるさま、威勢の良いさま」でどちらかといえば「りっぱですばらしい、感嘆させる」という意味合いがあります。ご質問の文は、「無謀な強気」「強気は崩れた」ということですので、「気性が強く積極的で大胆なさま」を表す「つよき」の方が適していると思います。

10. p14 3. 調査

市の広報原文に「皆増」という言葉が使われています。市に確認したところ、「すべて増加した」との意味で使用しているようです。ただし、「皆増」という言葉は国語辞典、広辞苑には記載されていません。どのように点訳すべきでしょうか。

【A】

広辞苑などの国語の辞書にはありませんが、「皆増」は「かいぞう」、「皆減」は「かいげん」と読むお役所の用語のようです。インターネットで検索してみると、総務省、農林水産省、財務省、その他各地方自治体のページが多くヒットします。

清瀬市のホームページに

「皆増」は、前年度に数値がなく、全額増加したものである。

「皆減」は、当該年度に数値がなく、全額減少したものである

このような解説がありました。

今年まで無かったけれど来年立ち上げる事業があった時、予算前年度比〇％増と書く欄に「皆増」と入れると新たに〇〇円の予算が付いた事業であることが分かる。ということのようです。皆減は今年まであったけれど来年度以降予算が付かない事業を表すようです。

「カイゾー」と書いた上で、もし説明が必要なら、点訳挿入符で囲み「アラタニ■ヨサンカ」「スベテ■ゾーカブン」「ゼンガク■ゾーカ」などのようにその場にあった言葉を入れてはどうでしょうか。

11. p14 3. 調査

「皆」の読み方についてお尋ねします。校正をしています。

Q&Aの形で田原総一朗さんのQとして書かれています。

「ぼくの場合、仕事で出会う人は皆、若い。若者との触れ合いは刺激を与えてくれる。・・・。」

点訳者は「みんな」と点訳しています。

以前別の本で、会話文の時は「みんな」のほうが自然だという事で「みんな」にしたことがあるのですが、この場合は「みな」の方がよいような気がしますがいかがでしょうか。漢字で「皆」とあったら基本的には「みな」と読むと思いますが、「皆」の読み分け方はありますか。どちらの読み方でも校正事項には当たりませんか。

【A】

「皆」は第1義的な読みは「みな」ですが、口頭語的な砕けた言い方として「みんな」の漢字表現としても用いられます。

ご質問の場合も「みな」が適しているのではないかと思います。点訳者が「みんな」と書いていけば、間違いとは言えないと思いますので、校正者の意見として書いてはいかがでしょうか。なお、このタイトル全体としての統一性もみた方がよいと思います。

12. p14 3. 調査

「ヨーロッパ原産で農薬においては重要な飼料・肥地味作物として知られていたが、アメリカインディアンがスキンケアと鎮静のハーブとして確立しヨーロッパに逆上陸した。」

上の文章の中の「肥地味」の読み方は「ヒヂミ」か「ヒジミ」かで悩んでいます。地味を「チミ」と「ジミ」では読み方で意味が違うようです。

【A】

精選版日本国語大辞典に「肥土（こえつち）」と同様の意味で「肥地（こえじ）」という見出し語があります。

ここから「肥地」＋「地味」で、コエジミと読んではどうでしょうか。

「地味」は、地質の意味で「ジミ」と読むこともあると国語辞典にありますし、「地面」「厚地」など「地」が濁音になる場合たいていジを用いますので、コエジミがよいと思います。

13. p14 3. 調査

「茶道」の読みについて、点訳者は「チャドー」と読んでいます。NHKの放送用語では、サドー、チャドーどちらも正しく流派に関わる場合は、その流派の読みを優先しているとあります。表千家は「サドー」のようです。話の内容が表千家のことなので指摘した方がいいのでしょうか。

【A】

表千家では「さどう」と読むのが一般的ですので、校正で指摘して《表千家では「さどう」と読む方がよい》ことを備考に書いてはどうでしょうか。

14. p14 3. 調査

語句の読みについて質問します。

(原文)

大阪・茨木市。住宅街のはずれに何棟もの府営住宅が立ち並んでいる。

何棟ものを「ナンムネ」と読みましたが、「ナントー」ものと校正が入りました。この地域の府営住宅は4, 5階の低層住宅ですので、ナンムネと読んでもよいと思いました。NHKの日本語研究所では高層、大型の住宅で違和感がある以外、ムネと読むのが良いとされています。わかりやすさからムネと読みたく思います。いかがでしょうか。

【A】

「何棟」は、「ナントー」とも「ナンムネ」とも読みますので、基本的に点訳の通りでよいと思います。

「むね」はどちらかと言えば、家屋・建物を、「とう」はどちらかと言えば、むねの長い建物・大きい建物（病棟、研究棟）を指す場合が多いようです。

「ナンムネ」は校正の指摘箇所には当たらないと思います。

15. p14 3. 調査

『枕草子：付現代語訳 下巻 新版』という書名があります。その「付・現代語訳」をどう書けばよいのでしょうか。

『マクラノ■ソーシ■■フ■ゲンダイゴヤク■■ゲカン■■シンパン』

『マクラノ■ソーシ■■ゲンダイゴヤクツキ■■ゲカン■■シンパン』

【A】

一般に書名が、「鍼灸補瀉要穴の図説明書 附 取穴論」のような場合は、書名や書誌の書き方としては、「フ」と書きます。

ただ、この本は、表紙には「付現代語訳」と書いてありますが、出版社のホームページをみると、書名としては「現代語訳付き」と書いてあるようです。

ですからこの図書は「ゲンダイゴヤクツキ」と書いてよいと思います。

16. p14 3. 調査

「乞食」の読みかたに関して伺います。

原本には『乞食の少女』、『乞食娘』とあります。この『乞食』は、「こつじき」＝僧侶が修行のため、人家の門前に立って、食を請い求めること。また、その僧、の意味ではなく、「こじき」＝食物や金銭を人から恵んでもらって生活すること。また、その人。ものもらい。の意味になります。

「放送注意用語」/「放送自粛用語」に「こじき」が示されているようです。

点訳において、「放送注意用語」/「放送自粛用語」を考慮した読み方を優先するべきでしょうか。どう読んだらよいでしょうか。

【A】

点訳は、原文の内容に忠実に点字に置き換えるものですので、「こじき」と書いてあれば、「こじき」と点訳します。

それが、「放送注意用語」「放送自粛用語」に入っているとしても、現在では「差別用語」とされる語でも、そのまま点訳します。

放送自粛用語などは、発信するメディアが自主的に規制しているものですので、すでに出版されている図書を点字に置き換える作業とは根本的に異なります。

一般に読まれる読み物、古典、出版されて書店に並ぶような本であれば、そのまま点訳し、原本で断られていなければ、点訳書凡例などで断る必要はありません。

17. p14 3. 調査

点訳での「分かち書き」を考える判断の一つで紙の辞書に記載されていないものは分かちにしないという考えがあるようですが、点訳では辞書になくても二字漢字の判断で分かちができるような文章を読んだことがありました。どうなのでしょう？

今、ライトノベルの本に出てきている「治療術師」という言葉で悩んでいます。

コトバンクの中で「術師」という言葉が『精製版日本国語辞典』から情報が記載されていますが、どうなのでしょう？

又、コトバンクなどのネットでの事典は点訳では使えないとのこととも言われます。紙の辞典での情報でなければ点訳では使えませんか？

【A】

点字の分かち書きや複合語の切れ続きは拍数と語種（和語・漢語・外来語など）や意味のまとまり（自立性）で判断します。

拍数と語種で迷わずに分かち書きを決められる語が殆どなのですが、複合語の切れ続きに迷う場合、いくつかの国語辞典に見出し語として掲載されているかどうか参考にします。

国語辞典は紙に印刷されたものでなければならないと言うことはありません。電子辞書でもネット上の辞典でも構わないのですが、普通名詞の切れ続きの判断は、基本的に「国語辞典」になります。

ネット上には、種々の辞典があり、それが国語辞典と言えるものか、百科事典的なものか、または個人の解釈か、判断が付かない場合がありますので、注意が必要になります。

コトバンクは、「出版社などが提供する辞書・辞典・データベースを横断して検索できるウェブサイト」ですので、コトバンクに収載されている典拠が国語辞典であれば、切れ続きの判断の参考にはなると思います。また、コトバンクは更新されますので、下調べ表に書く場合は《2024年5月16日、コトバンクの『精製版日本国語大辞典』より》と書けばよいと思います。「コトバンク」だけでは、典拠が分からないので不十分です。

「術師」は紙の日本国語大辞典にも載っています。そのほかの辞典には載っていないのですが、「⇒術者」とあり、術者を見ると「専門的技術に長じた人。また、魔術、忍術、あるいは占トの術を行なう者」とあります。「術者」は大辞林にも載っていて、同様の意味が書いてあります。

治療術師は、治療術の師ではなく、治療の術師の意味だと思いますので、チリョー■
ジュツシと書いて良いと思います。